中世のサムライヒーロー

楠公さんを知ろう

第2回

楠木正成の魅力を探る ～奥河内に育まれた「信じる心」～

阪南大学　国際観光学部　准教授　和泉大樹

南北朝時代の名将、楠木正成。彼は人としての魅力に溢れ、多くの人から頼られるリーダーであった。

そんな正成の、いかなる状況にも真っ直ぐに立ち向かう「信じる心」は、奥河内の風土や人々の暮らしとともに生まれ育ったものではないか、と私は思う。

――元弘3年（1333年）、鎌倉幕府は河内へと兵を進め、正成が布陣する千早城を取り囲んだ。『太平記』には、幕府の軍勢は200万騎とも記されている。もちろん実際の数ではないが、とにかく多くの兵で攻めたのであろう。一方の千早城は「廻り一里に足らぬ小城」に、千人に足りない兵であった。まさに「絶体絶命」といえようか。

しかし、正成は少数劣勢にあわてることなく冷静に判断・行動し、様々なアイデアをもって戦い、最後まで千早城が落とされることはなかった。『太平記』では、この時の正成の心情を「大軍に恐れることなく、応援を期待することもなく、城中で防戦する正成の心は、まことに厳粛なものであった」と表現している。――

不利な状況にも、なげかず、あきらめず、なぜ正成は自軍を勝利に導けたのか。

それは、自軍の一人一人を、千早城が屹立する豊かな自然を、天候をつかさどり、仲間の声が響きわたる空や風を、すなわち、この地を信じることができたからではないか。正成は、この「信じる心」が秘める無限の可能性をみごとに披露してみせたのである。

そんな正成の姿は、今を生きる私たちにカッコよく、魅力的に映る。かくありたいものである。

※『太平記』の文章表現は講本により異なります。